源氏物語における敬語の例外的取捨と語り手

山　本　ト　シ*

(1984年9月25日受理)

序

源氏物語の叙述の方法について玉上琢彌氏は，

『源氏物語』は，「いづれの御時にか」おわした，その光る源氏らを実際に知っている人，古御達が思い出話をする。それを筆記し編集して，この書にした，というたてまえである。

と述べられた[1]。

もしこのたてまえが貫かれるなら，古女房にとって敬語をつけるべき人物にはいつも敬語が使われ，例外が生じることはないであろう。しかし実際には，例外的に敬語が除去，又は付加されている例によくぶつかる。このような個所は，前述のたてまえが崩れているかもしれないところであり，換言すれば，このたてまえ以外にどんな方法で源氏物語が叙述されているかを究明する手がかりとなり得る個所である。

このような考えから，私は，第一部（桐壺巻〜藤裏葉巻）の地の文における敬語の使用状況を調べ，例外的な用法をすべて抜き出し，なぜ例外になるのかその原因を考え，更に源氏物語の表現方法，及び語り手の位相について考察した。

敬語の使用状況を調査する際の方針は次の通りである。

1．調査の対象は，桐壺巻〜藤裏葉巻の地の文とする。
2．テキストは角川文庫一〜五を使用した。敬語は書写の過程で揺れ動き易いものであり，青表紙本と河内本でも相当違うが，今は，青表紙本を底本とする角川文庫本に依った。
3．例外の基準は，玉上氏の示された「地の文で敬語の付きうるのは，皇族と上達部の列以上であり，特別の君達これに準じ，女性もほぼ同じい」[2] という原則に大体依った。
4．一文中の一つの敬語で敬意を代表させたと考えられる場合，その文中の他の語が無敬語でも例外と考えない。
5．会話や心内語をくくる括弧を，私見により補ったり，位置を改めたりした場合がある。又，心内語の末尾が地の文に流れている場合，心内語と見なせる部分は地の文としては扱わなかった。

* 国文学研究室

本論に入る前に，調査の結果の概略を述べておく。

敬語が例外的に取捨される原因として，次のようなことが挙げられる。

a．体験話法と言われる表現法による場合。体験話法とは，主観直叙法，又は語り手が作中人物と一体化した表現とも言われる。これにより敬語が除去されているのは第一部に90個所余りある。個所の数ではc項の方が多いが，aは一個所に異例の語がたくさんあるので，語の数で言えば，例外的に取捨される原因として最も大きいものである。a項に属する用例のうち本文に引用しなかったものは，本稿の最後に一括して掲げた。
b．臨場的表現と言われる表現法による場合。これは4個所ほどだが，a項と同じく，一個所の異例数が多い。
c．「思ふ」などの動詞や，心情を表す形容詞などに受けとめられる文脈内にある場合。これは110個所ほどあるが，一個所の異例語数は少ない。
d．作中人物間の身分差による場合。20余個所。
e．語り手が作中人物の行為に対し批判的な場合。10個所ほど。
f．慣用によると思われる場合。60個所ほど。
g．なぜ敬語が取捨されているのかわからない場合。30個所ほどある。この項に属する用例も，本文に引用しなかったものは最後に一括して掲げた。

以上のうち，c〜fの諸例は，語り手が近侍古女房だとしても，敬語が例外的に取捨されていることが無理なく理解できる。しかしa，bの諸例は，語り手が近侍古女房と考えるには不自然な表現であり，従って，源氏物語には玉上氏が指摘されたたてまえでは律しきれない叙述の方法があることを示唆しているように思われる。

a，bについては一に，c以下については二に，考察を述べたい。

一

(一)

若紫巻の密会の場面に，次のような文がある。（括弧内の漢数字は角川文庫の巻数，算用数字は頁数。以下同じ。）

○　いかがたばかりけむ，いとわりなくて見奉る程さ

へ，うつつとは覚えぬぞわびしきや。（若紫一173）

これは，源氏の気持が，心内語の形をとらず，そのままの形で表現された地の文である。このように，作中人物の心情が直接地の文に表現される方法を島津久基は「主観直叙法」と呼び[3]，西尾光雄氏は，近代以前の諸注釈書でこの表現法に注目した例を挙げつつ，独語 erlebte Rede の翻訳である「体験話法」という語を用いられた[4]。また近年，このような表現を，語り手と作中人物が一体化している，と見る研究者も多く，「一体化表現法」などと呼ぶことも出来るかと思う。

敬語が例外的に除去される用例の中には，この，作中人物の心情をそのまま地の文に写し取った表現（本稿では西尾氏に倣い「体験話法」の語を使う。）が多く見つかる。上の若紫巻の例でも，「見」，「覚え」の主語は源氏なのだが，例外的に無敬語になっており，又「たばかり」もその可能性がある[5]。以下に，体験話法故に敬語が例外的に除去されている例を検討していく。

○　「……いかなる名のつひに漏り出づべきにか」と思しつづくるに，身のみぞいと心憂き。（紅葉賀二60）（下線の語は，敬語が例外的に除去，又は付加されている語。以下同じ。）

上の文は，藤壺が赤子の顔を見ながら我が運命を嘆息するところで，「身のみぞいと心憂き」は藤壺の心情そのままを地の文に述べた表現，即ち体験話法である。

○　つひに御車どもたて続けつれば，ひとだまひの奥におしやられて，ものも見えず。心やましきをばさるものにて，かかるやつれをそれと知られぬるが，いみじう嫉きこと限りなし。榻などもみな押し折られて，すずろなる車の筒にうちかけたれば，またなう人わろく，悔しう，「何に来つらむ」と思ふに，かひなし。「ものも見で帰らむ」とし給へど，通り出でむ暇もなきに，「事なりぬ」と言へば，さすがに，つらき人の御前わたりの待たるるも，心弱しや。（葵二92）（〰〰線は通常の敬語の使い方がなされている語）

この文では，一個所「し給へど」と敬語をつけた描写が入っているが，全体としては，牛車を後方に押しやられた六条御息所の心情が直接地の文に表現されたものである。「ものも見えず」は御息所の立場に立っての描写。「嫉きこと限りなし」，「かひなし」，「心弱しや」も御息所の心情そのままであろう。最後の「つらき人の御前わたりの待たるるも，心弱しや」は，従来，語り手が御息所を評した草子地であると解されてきた[6]が，「待つ」が無敬語であること，自発の助動詞「るる」が，理性に反してつれない人を待つ気持が生じてしまうという意味を漂わせていることに注目すれば，「待たるるも，心弱しや」は，御息所自身の自省の嘆息ととれるのではないか。次の例と比べてみれば，このことははっきりすると思う。

○　御屏風どもなど，いとをかしき絵を見つつ，慰めておはするも，はかなしや。

右の「はかなしや」は，たわいもないことで次第に心が和んできた若草君（紫上）を，語り手が慈愛の眼で評したものと思う。「慰めておはする」と敬語が使ってあるので，「はかなしや」が語り手の発言であることは明らかである。もう一つ，

○　わが身ながら，これに似たらむはいみじういたはしう覚え給ふぞ，あながちなるや。（紅葉賀二62）

の「あながちなるや」も，上に「覚え給ふ」と敬語があるので，語り手の源氏批評である。これに対して，

○　（藤壺が）こよなう疎み給へるも，つらう覚ゆるぞわりなきや。（紅葉賀二55）

は，「覚ゆる」が無敬語であるので，「わりなきや」は源氏の心情であり，葵の巻の「心弱しや」と同様に，作中人物が自己を顧みたものと解せよう。

次に挙げるのは，「須磨には，いとど心づくしの秋風に……」に続く一節で，このあとには源氏の独詠歌がある。古来，須磨巻のクライマックスの一つとされている個所である。

○　ひとり目をさまして，枕をそばだてて四方のあらしを聞き給ふに，波ただここもとに立ち来るここちして，涙落つともおぼえぬに，枕浮くばかりになりにけり。（須磨三48）[7]

「波ただ……」以下が源氏の心に映ずることをそのまま述べた表現。文末の「けり」も，語り手の詠嘆ではなく源氏自身の詠嘆を表す。

○　うち顧み給へるに，来し方の山は霞はるかにて，まことに三千里のほかのここちするに，かいの雫もたへがたし。

ふる里を峰の霞は隔つれどながむる空はおなじ雲居か

つらからぬものなくなむ。（須磨三40）

上は，須磨浦に着いた直後の源氏の心細さを述べた個所で，先に引いた「ひとり目をさまして……」の少し前にある。「来し方は」以下が体験話法であろう。体験話法と独詠歌が組み合わされて場面を盛り上げているのは，「ひとり目をさまして」の個所と似た構成法である。

○　昔だに有るかなきかなりし中門など，まして形（かた）もなくなりて，入り給ふにつけても，いとむとくなるを，立ちまじり見る人なきぞ心安かりける。（蓬生三151）

上は，末摘花邸に源氏が入って行く場面。「見奉る」ではなく「見る」となっているのは，「立ちまじり……」あたりから，源氏の心情をそのまま写した表現になって

いるからだろう。文末の「ける」も源氏の詠嘆を表す。

○　ここら契り交して積もりぬる年月の程を思へば，かう浮きたる事を頼みて，捨てし世にかへるも，思へばはかなしや。（松風三183）

明石尼君はこの前後，敬語があるが，上の文だけ敬語がない。上の文全体が尼君の心情を写し取った体験話法であろう。

○　「御返り，ここにはえ聞えじ」と，書きにくく思いたれば，「まろ聞えむ」と代はるもかたはらいたしや。（真木柱五149）

「かたはらいたしや」は玉鬘の心情。「代はる」の主語は鬚黒で，玉鬘は心の中で夫に尊敬表現をしていないわけである。

今まで見てきたのは，作中人物の心の内奥や昂まった感情を述べる場合に敬語が除去される例であった。次に作中人物の視覚・聴覚・触覚などに映ずる事柄を述べる場合に敬語が除去される例を挙げよう。これらに敬語が落ちるのは，作中人物の感覚に映ずるままを地の文に写しとった表現になっているためで，この表現も体験話法と呼んでよいと思う。

○　ひとへにうちかけたる几帳のすきまに，暗けれど，うちみじろき寄るけはひいとしるし。（空蟬一99）

上の「うちみじろき寄る」の主語は源氏である。無敬語なのは，空蟬にとって近寄ってくるけはひは感じるが，その主（ぬし）が誰だかわからないからである。空蟬の感じ方がそのまま述べられることによって，男の近寄るひそかな気配は勿論，それに耳を澄ます空蟬の姿も読者の眼に浮かび上がらせる，効果的な一文となっている。

○　手をさし入れてさぐり給へれば，なよよかなる御衣に，髪はつやつやとかかりて，末のふさやかに探りつけられたる程，いとうつくしう思ひやらる。（若紫一182）

何度かの訪問を重ねて，源氏はやっと几帳ごしに若草君に触れることが出来る，その場面である。「なよよか」のあたりから源氏の触覚が捉えたままを述べた体験話法となっている。

第一部前半の巻々の中で，作中人物の感覚に感じられることを体験話法で述べた最も迫真的な描写は，玉鬘系の巻々にある次の二例ではないかと思う。

○　夜中も過ぎにけむかし，風のややあらあらしう吹きたるは。まして松のひびき木深く聞えて，けしきある鳥のからごゑになきたるも，ふくろふはこれにやとおぼゆ。うち思ひめぐらすに，こなたかなたけどほくうとましきに，人声はせず。などて，かくはかなき宿りはとりつるぞ，とくやしさもやらむかたなし。右近はものもおぼえず，君につと添ひ奉りて，わななき死ぬべし。またこれもいかならむと，心そらにて捕へ給へり。われひとりさかしき人にて，おぼしやるかたぞなきや。灯（ひ）はほのかにまたたきて，母屋のきはに立てたる屏風のかみ，ここかしこのくまぐましくおぼえ給ふに，ものの足音ひしひしと踏み鳴らしつつ，うしろより寄りくる心地す。（夕顔一130）

上の文では，冒頭から「やらむかたなし」までと，「ものの足音」以下が源氏の立場に立った表現。

○　まづ，居丈の高く，を背長に見え給ふに，「されば よ」と胸つぶれぬ。うちつぎてかたはと見ゆるものは，御鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物と覚ゆ。あさましう高うのびらかに，先の方（かた）すこし垂りて色づきたる事，ことのほかにうたてあり，色は雪恥づかしく白うて真青（まを）に，額つきこよなうはれたるに，なほ下がらなる面（おも）やうは，大方おどろおどろしう長きなるべし。痩せ給へる事，いとほしげにさらぼひて，肩の程などは，いたげなるまで衣（きぬ）の上まで見ゆ。「何に残りなう見あらはしつらむ」と思ふものからめづらしき様のしたれば，さすがにうち見やられ給ふ。頭（かしら）つき髪のかかりはしもうつくしげに，めでたしと思ひ聞ゆる人々にも，をさをさ劣るまじう，袿の裾にたまりて，ひかれたる程，一尺ばかりあまりたらむと見ゆ。（末摘花二38）

雪の朝，光の中に浮かび上がる末摘花の異様な姿と容貌が，源氏の眼に映ずるままに述べられる。「うち見やられ給ふ」とある他は源氏に敬語がない。末摘花にも敬語が少ないのは，やはり源氏の立場に立った描写だからであろう。夕顔巻の例，末摘花巻の例，共に体験話法の効果を十分に利用した臨場感に溢れる描写ではなかろうか。

○　ほどなく明けゆくにやとおぼゆるに，ただここにしも，「とのゐ申しさぶらふ」とこわづくるなり。（賢木二150）

上は，源氏の感覚が捉えたことをそのまま地の文に述べたものである。文末の，推定の意を表す助動詞「なり」は，語り手の立場ではなく，源氏の立場で使われている。体験話法には，この「なり」や先ほど（2p.）の「けり」のような主観性の強い助動詞や助詞が，作中人物の立場で使われていることが多い。

○　うち見るより，めづらしううれしきにも，ひとつ涙ぞこぼれける。住まひ給へるさま，いはむ方なくからめいたり。所のさま絵にかきたらむやうなるに，竹あめる垣しわたして，石の階（はし），松の柱，おろそかなるものから，めづらかにをかし。山がつめきて，ゆるし色の黄がちなるに，青鈍（にび）の狩衣指貫，うちやつれて，ことさら田舎びもてなし給へるしも，いみじう見るに笑まれて清らなり。取り使ひ給へる調度

も，かりそめにしなして，御座所もあらはに見入れらる。碁双六の盤，調度，弾棊の具など，田舎わざにしなして，念誦の具，行ひ勤め給ひけりと見えたり。（須磨三60）

上は，須磨の源氏を宰相中将が訪れる場面。この人は須磨巻では敬語がつくのが通例になっているが，この一節は無敬語である。「住まひ給へるさま」以下は，源氏の姿と侘びずまいのさまを，中将の眼に映るままに述べたものであろう。読者も源氏の住居の内部を，ここで初めて中将と共に知るわけである。

○　人もなく，月の顔のみきらきらとして，夢のここちもせず，御けはひとまれるここちして，空の雲あはれにたなびけり。（明石三70）

○　御いらへ聞ゆと思すに，おそはるるここちして，女君の「こはなどかくは」と宣ふに，おどろきて，いみじく口惜しく，胸のおき所なく騒げば，おさへて，涙も流れ出でにけり。（朝顔四67）

上の二例は，故桐壺院の霊，故藤壺の霊が源氏の眼前に出現するところ。源氏の立場に立った表現で述べられ，臨場感・緊迫感の溢れた場面になっている。

○　ほほづきなどいふめるやうにふくらかにて，髪のかかれる隙々美しう覚ゆ。まみのあまりわららかなるぞ，いとしも品高く見えざりける。その外はつゆ難つくべうもあらず。（野分五71）

玉鬘には通常敬語がつくが，上の一節はつかない。ここは，傍に居る源氏の眼が捉えた玉鬘の姿を，源氏の感覚のままに地の文に述べたため，源氏，玉鬘に敬語がつかないのだろう。

これまで見てきたように，作中人物の深い心の奥や，感覚が捉えた事柄を述べる場合に敬語が除去されることが多い。このような内容を述べる時は，その人物が考えたまま，感じたままを直接地の文に述べるという表現法（＝体験話法）がとられるので，地の文であるにも拘らず，敬語の使い方は，当の人物を基準にしたものになるのであろう。

ところで，作中人物の考えたまま，感じたままが地の文に表現される，ということは，語り手の側から言えば，語り手が作中人物と一体化し，作中人物の心情や感覚を体験したかのように語る方法，とも言えるだろう。

次に，夕霧が無敬語で扱われることの多い野分巻を検討する。この巻で，夕霧は三人の女性を垣間見する。みな長文なので，紫上垣間見のみ引用する。

○　中将の君参り給ひて東の渡殿の小障子のかみより妻戸のあきたる隙を何心もなく見入れ給へるに，女房のあまた見ゆれば，立ちとまりて音もせで見る。御屏風も，いたく吹きければ，押したたみ寄せたるに，見通しあらはなる廂の御座にゐ給へる人，物に紛るべくもあらず，気高く清らに，さと匂ふ心地して，春の曙の霞の間より面白き樺桜の咲き乱れたるを見る心地す。あぢきなく，見奉るわが顔にも移りくるやうに愛敬は匂ひ散りて，またなく珍しき人の御さまなり，御簾の吹きあげらるるを人々押へて，いかにしたるにかあらむ，うち笑ひ給へる，いといみじく見ゆ。花どもを心苦しがりて，え見棄てて入り給はず。御前なる人々も，さまざまに物清げなる姿どもは見渡さるれど，目移るべくもあらず。大臣のいと気遠くはるかにもてなし給へるは，かく，見る人ただにはえ思ふまじき有様を，いたり深き御心にて，もしかかることもやと思すなりけり，と思ふに，気配恐しうて立ち去るにぞ，西の御方より，内の御障子ひきあけて渡り給ふ。「いとうたて，あわただしき風なめり。御格子おろしてよ。男子どもあるらむを，あらはにもこそあれ」と聞え給ふを，また寄りて見れば，物聞えて大臣もほほゑみて見奉り給ふ。親とも覚えず，若く清げになまめきていみじき御かたちの盛りなり。女もねびととのひ，あかぬ事なき御様どもなるを身にしむばかり覚ゆれど，この渡殿の格子も吹き放ちて立てる所のあらはになれば，恐しうて立ちのきぬ。今参れるやうにうち声づくりて簀子の方に歩み出で給へれば，「さればよ。あらはなりつらむ」とて，「かの妻戸の開きたりけるよ」と今ぞ見とがめ給ふ。「年頃かかる事の露なかりつるを，風こそげに巌も吹き上げつべきものなりけれ，さばかりの御心どもを騒がして，珍しく嬉しき目を見つるかな」と覚ゆ。（野分五62）

上の中で，「御屏風〜見渡さるれ」と「物聞えて〜あかぬ事なき御様どもなる」のあたりが御簾内部の情景である。ここに限らず，三場面とも，夕霧の垣間見る御簾内部の情景は，夕霧が眼にし，耳にしたままが地の文に描かれる。今までいくつかの用例を見てきた，作中人物の感覚に映ずることを直接地の文に述べた，典型的な体験話法である。

この典型的な体験話法の部分の前後に，「見る」「思ふ」「立ち去る」「寄りて見れば」「立ちのきぬ」（以上，紫上垣間見），「思ひ渡る心にて」「引きあげて見るに」「目とまりぬ」「見れば」「ほの聞く」「思ひて立ち去りぬ」（以上，玉鬘垣間見），「ひききて」「見れば」「思ふ」（以上，明石姫君垣間見）など，夕霧の動作・思惟・状態を示す語が無敬語で使われている。このような語は，夕霧を客観的に描写しているようにも受けとれ，島津氏，西尾氏，共に主観直叙法や体験話法の例には挙げておられない。しかし私は，夕霧の動作や状態などが無敬

語となるのも，今まで見てきた体験話法と同質の表現故と考える。なぜなら，紫上垣間見の文末にある「覚ゆ」は，典型的な体験話法中によく使われる語だが，同じ引用文中の「思ふ」との間に意味上の区別はつけ難いように思う。そして「思ふ」と「見る」「立ち去る」との間にも表現の質の違いは認めにくい。つまり，「覚ゆ一思ふ一見る，立ち去る」などの間は不可分につながり，この間に一線を引くことは難しいと思うのである。又，御簾内部の情景を述べた部分と，夕霧の動作や状態を述べた部分はなだらかに続き，文章的にも懸隔を見出すのは困難である。従って，体験話法を西尾氏の定義より広く捉え，夕霧の動作，状態，思惟を無敬語で述べるのも，体験話法であると考えたい。先に，体験話法とは，語り手の側から言えば，語り手が作中人物と一体化し，その心情や感覚を体験したかのように語る方法であると述べた（4p.）が，「見る」や「思ふ」も，語り手が夕霧と一体化し，夕霧の動作・思惟・状態を体験したかのように語っている，と考えられないだろうか。無敬語になるのは，敬語使用の基準が夕霧に置かれるためであろう。因みに根来司氏は「『立ちとまりて音もせず見給ふ』とあるべきなのにただ『見る』とあるのは（略）話主が作中場面の中で作中人物夕霧と一体になっているそのせいであると考えてまちがいなかろう」と述べておられる[8]。又，若紫巻における垣間見の「と思ふ心，深うつきぬ」という語句は，先に見た典型的な体験話法というより，動作・状態を無敬語で述べたものに近いと思われるが，玉上琢彌氏はこの文を島津氏の言う主観直叙法に相似たものと考えておられる[9]。お二人は動作や状態を無敬語で述べるのは，作中人物と語り手が一体化した表現或いは主観直叙法，即ち本稿で体験話法と呼んでいるものと同類と考えておられるようである。

さて，野分巻全体に目を移すと，源氏と語る場面，三条邸の大宮を見舞う場面，花散里を見舞う場面，明石姫君の女房と語る場面の夕霧には敬語がつく一方，垣間見の衝撃を反芻しつつ一人思いに耽る場面では無敬語になる。無敬語になる動詞は，「思ふ」及びその複合動詞である「思ひ寄る」「思ひ出づ」「思ひ続く」，又「忘る」「覚ゆ」など，心の動きを表す語か[10]，或いは「見る」「立ちのく」「ほの聞く」などのような具体的動作を表す語でも，それは秘かに行われる動作である。つまり，他の人物が目撃し得る動作は敬語つきで述べられ，誰も知り得ない動作や状態は無敬語で述べられるわけである。そしてその転換は，次の例に代表される如く，すばやく行われる。

○　……恐しうて立ちのきぬ。今参れるやうにうち声づくりて簀子の方に歩み出で給へれば（野分五63）

○　……とざまかうざまに思ひつつ，東の御方に先づまうで給へれば（野分五66）

行幸巻，藤袴巻でも，夕霧の心理が垣間見の時とつながり，一人の思いに没入する個所は，次の三例の如く，無敬語である。

○　「あやしの事どもや。むべなりけり」と，思ひ合はする事どもあるに，かのつれなき人の御有様よりも，なほもあらず思ひ出でられて，「思ひ寄らざりける事よ」と，しれじれしきここちす。されど，あるまじう，ねぢけたるべき程なりけり，と思ひ返す事こそは，あり難きまめまめしさなめれ。（行幸五94）

上は，夕霧が源氏から玉鬘の素姓を知らされた後の思い。ここに草子地があることについては後に考察する。

○　かの野分の朝（あした）の御朝顔は，心にかかりて恋しきを，うたてある筋に思ひし，聞きあきらめて後は，なほもあらぬここち添ひて，「この宮仕へを，大方にしも思し放たじかし。さばかり見所ある御あはひどもにて，をかしき様なる事の煩はしきはた，必ず出で来なむかし」と思ふに，ただならず胸ふたがる心地すれど（藤袴五106）

上は夕霧が玉鬘を訪問した場面。この前後の，玉鬘と言葉を交わすところは夕霧にも敬語がつく。

○　（源氏の）御気色はけざやかなれど，なほ疑ひはおかる。（藤袴五111）

上は夕霧が玉鬘とのことにつき源氏を問い詰める場面の中にあり，この前後の，源氏に語るという動作には敬語が付く。

玉鬘十帖と同様な敬語の有無の使い分けは，遡った乙女巻の夕霧にも見られる。この巻の夕霧は，元服，大学入学，寮試及第，やがて進士となり侍従となる，という公的な生活と，雲居雁との幼な恋に悩む私的な生活とが描かれる。前者の公的な生活の場面ではすべて敬語がつくが，後者の，特に一人で思いに沈む場面では敬語がつかない。例えば，

○　（大宮から雲居雁のことを言い出されて）心にかかれる事の筋なれば，ふと思ひ寄りぬ。（乙女四90）

○　道の程（「六位宿世」と雲居雁の乳母から言われ家へ帰る途次），人やりならず，心細く思ひ続くるに，空の気色もいたう曇りて，まだ暗かりけり。（乙女四97）

○　（惟光女の）かたちはしもいと心につきて，つらき人のなぐさめにも，見るわざしてむや，と思ふ。（乙女四101）

の如くである。しかし，乙女巻では，夕霧の心情や観察をそのまま地の文に述べる典型的な体験話法は少ない。

野分巻に続いて，行幸巻，藤袴巻，及び乙女巻において，夕霧の一人だけの思惟や秘かな動作・状態に敬語が

つかないことを見てきた。これらも野分巻の垣間見の場面と同様に，語り手が夕霧と一体化して彼の動作・思惟・状態を述べる語り口であり，無敬語なのは敬語の使い方の基準が夕霧に置かれているためと考えてよいのではないか。

第一部前半の源氏の場合は，藤壺への深い思慕，及びそのゆかりの若草の君に対する愛着を述べるところに，よくこの表現が用いられる。

○　「これに，たらず，又さしすぎたる事なく，ものし給ひけるかな」とありがたきにも，いとど胸ふたがる。（帚木一77）[11]

○　さるは，限りなう心をつくし聞ゆる人に，いとよう似奉れるがまもらるるなりけり，と思ふにも，涙ぞ落つる[12]。（若紫一157）

○　「さても，いとうつくしかりつるちごかな，なに人ならむ。かの人の御かはりに，明け暮れの慰めにも見ばや」と思ふ心，深うつきぬ。（若紫一158）

○　ゆかりいと睦ましきに，いかでか，と深うおぼゆ。（若紫一171）

○　（藤壺の文を見て）胸うち騒ぎて，いみじくうれしきにも涙おちぬ[12]。（紅葉賀二63）

○　つきもせぬ心のやみにくるるかな雲ゐに人を見るにつけても

とのみひとりごたれつつ，ものいとあはれなり。（紅葉賀二76）

○　（藤壺の）御けはひも，ほのかなれど，なつかしう聞ゆるに，つらさも忘られて，まづ涙ぞ落つる。（賢木二165）

いずれも源氏の思慕の切実さが伝わってくる文だが，これらも語り手が源氏と一体化して，源氏の心情や状態を語っている，と考えてよかろう。

ここで今まで述べてきたことをまとめておきたい。

源氏物語では，語られる内容が，作中人物の心の内奥や感覚に映ずる事柄，ひそかな動作・思惟・状態に及ぶ時，語り手は作中人物に一体化し，語り手自身が作中人物の心情・感覚・動作・思惟・状態を体験しているかのように語る，という表現法（＝体験話法。或いは一体化表現法と呼んでもよいかと思う。）がよく使われる。この表現法は，今回調査した第一部全体にわたって広く見られるものである。体験話法では，語りの視点がある作中人物に置かれるため，敬語の使用法もその人物を基準としたものになり，通常の地の文とは異なってくるのである。体験話法は，読者に，他の作中人物の知り得ない，ある人物の真実の心や感覚，ひそかな動作・状態を知らせたり，場面の緊迫感・臨場感を生き生きと感じさせたりすることのできる，大変効果的な叙述の方法である。

猶，次のように，敬語が関わらない体験話法も多くある。

○　あなたよりは鎖さざりけり。（帚木一83）

○　（惟光は）まほならねども見し程を，思ひやるもをかし。（若紫一172）

帚木巻の例は源氏の詠嘆がそのまま地の文に表現されたもの，若紫の例は惟光の心情がそのまま地の文に表現されたものである。このような体験話法は，敬語の用法に注目するのとは別の方法で――例えば，主観性の強い助動詞・助詞や，形容詞・形容動詞に注目することによって――見付け出さなければならない。本稿の方法で体験話法の見出せなかったのは，桐壺，明石，澪標，関屋，初音，篝火，藤裏葉の各巻だが，これらの巻々にも，敬語の関わらない体験話法が使用されている可能性は十分にあるわけである。

（二）

次に，若紫巻の垣間見の場面について検討したい。ここでは，源氏の視線に添って小柴垣の内部が描写され，

○　ただこの西面にしも，持仏すゑ奉りて行ふ，尼なりけり。簾少し上げて花奉るめり。（若紫一156）

と，源氏の詠嘆や推量をそのままに写しとった表現，即ち体験話法もある。垣間見をされる側の尼君や若草君に敬語がつかないのも，源氏に添った視線でこの場面が描かれていることを思わせる。しかし野分巻の垣間見と異なるのは，垣間見をする源氏には必ず敬語が用いられ，語り手が作中人物と一体化しているとは言えないことである。この叙述の方法をどのように考え，尼君や若草君に敬語がつかないことを，どう解釈したらよいだろうか。

吉岡曠氏は，源氏物語の地の文の形態として

1.　草子地
2.　説明的表現
3.　臨場的表現
4.　体験話法

の四つがあることを指摘され，「この四態は語り手の生身の語り口が次第に影をうすめていく過程という風にもとらえることができる」と述べておられる[13]。氏の分類は，地の文の語られ方という観点からなされたものだが，敬語の使われ方の点から見ても適切であるように思う。氏によれば，臨場的表現とは「抽象的存在と化し」た語り手が「あたかも（事件の現場に）いたかのような顔をして叙述してゆく部分」であるという。先に見たように，野分巻垣間見の場面は完全な体験話法で語られていたが，若紫巻垣間見の場面は，氏の言われる臨場的表現を基調としており，その違いが敬語の使われ方の違いにも表れているのではなかろうか。この場面では，語り手は源氏と共にあり，源氏の視線が動くにつれて語り手

の視線も動いて小柴垣内部の情景を捉える。そこにいるのがどういう階層の人なのか源氏にはわからないことを反映し，御簾内部の人々に敬語は使われない。しかし語り手はあくまで源氏の外側にあり，源氏と一体化しているわけではない。この場面の語り手の位置をこのように捉えることによって，尼君や若草君に敬語が付かず，源氏には普通どおり付く，という現象を説明できるのではないかと思う。

同様な例として，花宴巻における源氏と朧月夜君の出会いの場面を挙げることができる。源氏には一個所を除いて敬語が付き，朧月夜には付かない。源氏に付かない一個所とは「やをら抱き下して，戸は押し立てつ」であり，これは語り手の位置とは別次元の，素早い行動を写す時の特殊な用法ではないかと私は考えている（ p.4のハ参照)。語り手は源氏の視線に添って，この素姓不明の女君を無敬語で描くが，語り手は源氏と一体化するわけではなく，源氏には敬語を用いる。注目すべきは，外からは窺い知ることのできない筈の女君の内面が，「(源氏が) 宣ふ声に，『この君なりけり』と聞き定めて，いささか慰めけり。わびしと思へるものから，『なさけなくこわごわしうは見えじ』と思へり」と描かれていることである。するとこの語り手は，源氏に添うばかりでなく，相手の人物の内側にも入りこめる，かなり自由な視点を持っているということになる。

花宴巻末の再会の場面で朧月夜に敬語がないのも，出会いの場面と同様な手法のためと考えてよいだろう。女君に敬語がないことは，源氏ばかりでなく読者をも再び出会いの時と同じ世界に引きこむ効果をもっている。

賢木巻の密会場面で右大臣が源氏を発見するところ，次のように源氏に敬語がつかないのは，右大臣にとって几帳の中の男が誰やら分からないからで，ここの描写も右大臣の眼に添ったものであろう。

○ （右大臣は）几帳より見入れ給へるに，いといたうなよびて，つつましからず添ひ臥したる男もあり。今ぞ，やをら顔をひき隠して，とかう紛はす。（賢木二180）

（三）

次に，体験話法，臨場的表現を用いて語っている語り手の性格について考察したい。まず体験話法から考えてゆく。

紫式部が，近侍女房を語り手とするたてまえを設定していることは，例えば次のような草子地によって明らかである。

○ まだ中将などにものし給ひし時は，うちにのみさぶらひようし給ひて，おほいとのにはたえだえまかで給ふ。しのぶの乱れやと疑ひ聞ゆることもありしかど（中略）さるまじき御ふるまひもうちまじりける。（帚木一50）

○ かやううのくだくだしき事は，あながちに隠ろへ忍び給ひしもいとほしくて，皆もらしとどめたるを（中略）あまり物言ひさがなき罪，さりどころなく。（夕顔一150）

○ あはれと忍ばるばかり尽くい給へるは，見所もありぬべかりしかど，その折のここちのまぎれに，はかばかしうも聞き置かずなりにけり。（須磨三23）

ここにその存在を示されている，近侍女房としての語り手と，体験話法の語り手とは，一体同じなのであろうか。

注目されるのは，体験話法の中に，草子地が現れることである。

○ （末摘花の）頭つき髪のかかりはしもうつくしげに，めでたしと思ひ聞ゆる人々にも，をさをさ劣るまじう，袿の裾にたまりて，ひかれたる程，一尺ばかりあまりたらむと見ゆ。着給へる物どもをさへ言ひたつるも，物言ひさがなきやうなれど，昔物語にも，人の御装束をこそ先づ言ひためれ。（末摘花二38）

○ 色黒く鬚がちに見えて，いと心づきなし。いかでかは女のつくろひたてたる顔の色あひには似たらむ。（行幸五80）

○ 「殿の（花散里を）さやうなる御かたち，御心と見給うて，浜ゆふばかりのへだてさしかくしつつ，何くれともてなしまぎらはし給ふめるも，むべなりけり」と思ふ心のうちぞはづかしかりける。（乙女四104）

○ 八重山吹の咲き乱れたるさかりに露のかかれる夕映ぞ，ふと思ひいでらるる。折にあはぬよそへどもなれど，なほうち覚ゆるやうよ。（野分五72）

この他に先に引用した（5 p.）行幸五94の例もある。これらの例では，作中人物と一体化して語っていた語り手は急速にそこから離れて，その人物を批評したり，今までの語りの弁解をしたりする。上の草子地は体験話法と相い接して現れるのだから，上の草子地の語り手と上の体験話法の語り手は同一と考えてよいだろう。そしてその語り手とは，体験話法全般の語り手でもあるだろう。

ここで，体験話法の語り手の条件を整理してみる。

1. 当の作中人物しか知り得ぬ，秘かな心情や動作などを述べる。
2. 作中人物に一体化して語る。その際，その人物に敬語を用いない。
3. 作中人物に一体化し，またすぐに離れて語り手としての意見（草子地）を述べる。
4. 作中人物が衆人監視の行動に移ると，すぐに敬語付きの表現に変える。

上のような諸条件を備えている語り手とは，固定的，具体的な像を持つ，光源氏らに近侍した女房より，もっと自由で，もっと語りに徹した存在なのではなかろうか。又，藤壺や源氏などの高貴な人物と一体化し，無敬語で語れるのは，近侍女房とは考えにくい。更に，他の作中人物の目に触れない事柄を語れる，という条件を考えれば，全知視点を持っていなければならない。とすると，体験話法の語り手とは，「語り手」というよりも「作者」に近い存在なのではなかろうか。

野分巻の垣間見の場面などに関して，「語り手は消滅している」と言われることがある。しかし，すぐ続いて草子地があることでもわかるように，体験話法は，むしろ，作者に近いその語り手が姿を顕わにして語っている部分なのではないか。消滅しているのは，近侍女房としての語り手なのである。そして，体験話法と相い接している草子地は近侍女房の発言ではなく，作者に近い語り手の発言なのではなかろうか。

次に，臨場的表現の語り手の性格について考えたい。この語り手は，視点となる人物と一体化するわけではなく，その人物には敬語を使う。しかし作中人物の視点に立った描写をすること，その人物の知る筈のない相手の人物の心理をも知っていることから，やはり，近侍古女房より自由で，且つ全知視点を持っている語り手であることが知られる。つまり臨場的表現の語り手の性格は，体験話法の語り手の性格に近い。この二つの表現は，近侍古女房とは位相の異なる語り手によってなされていると考えるべきなのではなかろうか。

では，近侍女房を語り手とするたてまえと，体験話法及び臨場的表現とは，どのような関係にあるのだろうか。近侍女房の発言と見なせる草子地，及び近侍女房の回想を表すと見なせる助動詞「き」[14] が出てくる個所では明らかにこのたてまえが貫かれている，と言ってよい。もし紫式部が，たてまえと，体験話法・臨場的表現とを，場面や話題によって使い分けているなら，近侍女房の存在が示されている個所と，体験話法・臨場的表現が用いられている個所では，場面や話題がはっきり分かれるだろう。若紫巻の北山行きでは，冒頭部で「御ともにむつまじき四五人ばかりして，まだあかつきにおはす」と，近侍女房は同行しなかったことが明示され，そのあとの道中や垣間見の場面などに，体験話法，臨場的表現が用いられる。その間，草子地や近侍女房の回想の「き」は出てこない。しかしこのような例は稀であって，夕顔巻，末摘花巻，須磨巻などの体験話法が頻出する個所でも，近侍女房の回想の「き」はないが，近侍女房の発言と見なせる草子地はよくあるのである。従って，紫式部が，近侍女房の語りと，体験話法・臨場的表現を，場面や話題によって厳密に使い分けたとは思えない。

想起されるのは，物語の中の重要な場面や事柄を述べる時に体験話法，臨場的表現が使われることである。北山での垣間見，藤壺との密会，長く執拗に続く藤壺への思慕，廃院の夜の恐ろしさ，末摘花の異様な容貌，車争いにおける六条御息所の心情，朧月夜との出会い，須磨流謫の侘びしさ，六条院の秩序を揺さぶるかのような夕霧の垣間見，等々，第一部の物語の要所にはよく体験話法や臨場的表現が用いられ，そのために場面や人物の心情が，我々読者にとって，特に印象深いものになっているのである。

紫式部は，源氏物語を書くにあたって，作中人物に近侍した女房を語り手として設定した。これは，物語に現実性を持たせるための大切な技巧であったろう。この技巧は，例えば桐壺巻の「伊勢，貫之」，「宇多の御いましめ」，「鴻臚館」など，実在の人物や物事が記されることと相俟って，この物語が実際あった話であるかのような錯覚を読者に与えただろう。しかしもう一面の現実性，即ち場面の迫真性や人物の心情の真摯さを描く時には，この設定は窮屈な枷となる。そのような時，紫式部は，設定に縛られず，体験話法や臨場的表現といわれる，自由で巧みな叙述の方法をとったのではなかろうか。

二

この章では，敬語が例外的に取捨されているが，光源氏らに近侍した古女房の語り，というたてまえと矛盾しないものについて説明する。四つの項目に分けて述べる。

1. 「思ふ」，「言ふ」，「知る」，「忘る」，「書く」などの動詞，又は，心情を表す形容詞・形容動詞によって受けとめられる文脈は，これらの語の意味する動作や心情の，内容や対象を表す。従って，この文脈内は心内語に準じた敬語の使い方になる。次に例を挙げるが，下線は敬語が例外的に取捨されている語。下点がそれを受けとめる語。

○　ちよを過ぐさむここちし給ふ。（夕顔―130）

○　ほかげに見し顔おぼし出でらる。（夕顔―146）

○　あはれと思ひし人のはかなきさまになりにたるを，あみだ仏にゆづり聞ゆる由，あはれげに書き出で給へれば（夕顔―147）

○　としごろ思ひわたるさまなどをいとよく宣ひ続くれど（末摘花―147）

○　また人も出で来ねば，帰るもなさけなけれど，明け行く空もはしたなくて殿へおはしぬ。（若紫―184）

○　さてはづしてむは，いと口惜しかるべければ，まだ夜深う出で給ふ。（若紫―188）

○　ふり出でて行かむ事もあはれにて（末摘花二37）

上の七例の主語はいずれも源氏。後の三例は，「なさけ

なしと思せど」，「口惜しかるべしと思せば」，「あはれに思して」の「思す」の部分が省略されたのであって，前四例の変型と考えられる。次のように「思す」が省略されず，形容詞・形容動詞の後に更に動詞がくる例もある。

○　東宮見奉らでおも変りせむこと，あはれに思さるれば忍びやかにて参り給ふ。（賢木二156）

○　対面せむもいとつつましく思したり。（蓬生三151）

次のような例もこのグループの変型と見なしてよいだろう。

○　おり居なむの御心づかひ近くなりぬるにも（澪標三104）

○　似ついたる見むの御心なりけり。（玉鬘四152）

○　思ひしめてし事は，さらに御心に離れねど（賢木二171）

○　年月を経ても，なほかやうに，見しあたり，情すぐし給はぬにしも（花散里二185）

後の二例は，下点の語を「忘れ給は」とでも置き換えてみれば，この型の変型にすぎないことがわかる。

1に述べたような例は，亀田定樹氏も「内話の叙述が地の叙述に融合的に移行する」としておられる[15]。内話と同様な部分に於いては内話と同様な敬語の使われ方がされるのは当然であって，**1**に挙げた文例は，近侍古女房の語りの部分と見て差し支えない。

2.　動作の相手との身分関係により，敬語が例外的に取捨される。イ，ロ，二つの場合に分けて述べる。

イ. 通常の地の文では敬語の付く人物が，より身分の高い人物と共に叙述される時，敬語が除去される。

○　いと若ううつくしげにて，せちに隠れ給へど，おのづから見奉る。（桐壺一44）

○　をさなごこちにも，はかなき花もみぢにつけても，心ざしを見え奉る。（同上）

入内したばかりの藤壺に，少年源氏が心を寄せるさまである。源氏に敬語がないことは，二人の身分差，年令差を読者に印象づけ，源氏にとって藤壺は手の届かぬ存在なのだということを強調しているように思われる。

○　（冷泉帝が）思し悩むも，（玉鬘は）いとかたじけなしと見奉る。（真木柱五145）

玉鬘は通常は敬語が付くが，相手が帝の時は付かない。帝と玉鬘の身分差を考慮して，敬語が外されたのだと思う。

桐壺更衣は，桐壺帝と共に叙述される時は敬語が付かない。これも身分差の故であろう。

○　あさゆふの宮仕へにつけても，人の心をのみ動かし，恨みを負ふつもりにやありけむ，いとあつしくなりゆき，もの心ぼそげに里がちなるを，いよいよあかずあはれなるものに思ほして（桐壺一25）

この他，更衣が病のために宮中を退出する際，帝と別れを惜しむ場面のクライマックスでは付かない。又，死後帝に思い出されるところでも付かない。

少女時代の紫上，即ち若草君が源氏と共に描かれる時，敬語がつかないことがある。

○　（源氏が）ものよりおはすれば，（若草君は）まづ出で迎ひて，あはれにうち語らひ，御懐に入りゐて，いささか疎く恥づかしとも思ひたらず。（若紫一194）

○　（源氏が）日頃の御物語，御琴など教へ暮らして出で絵ふを，（若草君は）例の，と口惜しう思せど今はいとようならはされて，わりなくは慕ひまつはさず。（花宴二82）

後の例では「思せ」に敬意が表れているものの，敬語の使い方は少ない。若紫巻の例，花宴巻の例ともに，源氏と比した若草君の幼さを強調するために敬語を除去したのだろう。

○　殿の中将（夕霧）は，少しけ近く，みすのもとなどにもよりて，御いらへみづからなどするも，女（玉鬘）はつつましう思せど，さるべき程と人々も知り聞えたれば，中将はすくずくしくて思ひもよらず。（胡蝶四176）

上は夕霧が玉鬘を姉と思って訪れるところ。玉鬘には敬語が付き，夕霧には付かない。二人の間には七歳ほどの年令差があるという。ここは玉鬘を御簾の中の妙齢の姫君，夕霧を年下の少年として語り手が扱っているために，玉鬘には敬語を用い，夕霧には用いなかったのだと思う。

○　大臣，程なく空酔ひをし給ひて，乱りがはしく強ひ酔はし給ふを，（夕霧は）さる心していたうすまひ悩めり。（藤裏葉五176）

上の例で夕霧に敬語がないのは，内大臣との対比のためではないか。篝火巻において，源氏の前で楽を奏する夕霧，柏木，弁少将に敬語が付かないのも，源氏と彼らの年令差，社会的地位の差を表していると思う。

○　なつかしき程に萎えたる御装束に，かたちも，かの並びなき御光にこそ圧（お）さるれど，いと鮮やかに男（を）々（を）しき様して，ただ人と見えず，心恥づかしげなり。（真木柱五128）

鬚黒をほめているのに敬語が付かないのは，「かの並びなき御光＝源氏」と対比しているからではないか。

ロ. 通常の地の文では敬語の付かない人物が，より低い身分の人物と共に叙述される時，敬語が付加される。

夕顔，空蟬には通常は敬語が付かないが，動作の相手によっては，次のように謙譲語や尊敬語が用いられる。

○　（夕顔の遺骸を）惟光乗せ奉る。（夕顔一132）
○　（夕顔の乳母は）夜昼恋ひ泣きて，さるべき所々を尋ね聞えけれど（玉鬘四119）
○　（夕顔が，右近の）夢などに，いとたまさかに見え給ふ時などもあり。同じさまなる女など添ひ給うて，見え給へば（玉鬘四119）
○　（右近は）君の御事は言ひ出でず。（玉鬘四132）
○　君（空蟬）の御事をのみ（空蟬の夫は）言ひおきて（関屋三160）
○　女君（空蟬），……と思ひ嘆き給ふを（空蟬の夫が）見るに（関屋三160）

柏木は藤裏葉巻で敬語が付かないが，ただ一個所，

○　中将（柏木），をかしき様にもてなし給ふ。（藤裏葉五179）

と敬語が付くのは，もてなす相手が，夕霧の文使いという，身分低き者だからであろう。

帚木巻の頭中将はまだ敬語が付かないのが原則だが，雨夜の品定めでは，左馬頭，式部丞に対する動作には敬語が付くという傾向があるようである。敬語が付くのは

○　心入れてあへしらひ居給へり。（帚木一61）
○　中将いみじく信じて，つらづゑをつきて向かひ居給へり。（同62）
○　言ひはやし給ふ。（同63）
○　責めらる。（同73）
○　頭の君，まめやかに，「おそし」と責め給へば（同73）
○　すかい給ふを（同74）

の六例で，いずれも左馬頭，式部丞に対する動作である。二人に対する動作でも敬語が付かない文は二例あるが，そのうち一例は次に源氏に関する叙述があり，源氏の存在が頭中将の敬語を落としていると考えられる。

このような諸例を眺めると，諸説のある，帚木・空蟬巻で空蟬や軒端荻に敬語が使われている理由も，周囲の人物との身分差の故ではないかと思う。空蟬に敬語が付く三個所（帚木一87，同92，空蟬一103 計七語）の共通点は，小君に対する動作，又は小君が居る所での動作ということである。ただ，姉と弟で，姉に敬語を付けねばならぬほどの身分差があるかは疑問だが，その点は二人の年令差，受領の妻というそれなりの地位の重さ，又，荒井弘氏の言われる源氏の愛人という立場[16]などを考えれば，納得がいくのではないかと思う。小君に対する動作でありながら敬語がつかない二つの語については，それが「言ひおどす」，「言ひ放つ」という貴婦人らしからぬ行為だから，という荒井氏の考えに与したい。

軒端荻の場合は，玉上氏の言われるとおり[17]，文中には現れない，軒端荻にかしづく女房たちを想像するべきなのだろう。

3.　あまり感心しない行動や心に，敬語が付かないことがある。源氏の場合は，次のような例が挙げられる。

○　（自分が思いきって出家できないのは）なぞやとおぼしなるに，まづ姫君の心にかかりて，思ひ出でられ給ふぞ，いとわろき心なるや。（賢木二158）
○　「まして朝顔もねびまさり給へらむかし」と，思ひやるもただならず。恐ろしや。（賢木二168）
○　（御簾のむこうの斎宮女御を）見奉らぬこそ口惜しけれ，と胸のうちつぶるるぞ，うたてあるや。（薄雲四43）
○　（玉鬘からの返事を見て）かやうのけしきはさすがにすくよかなり，と，ほほゑみて，うらみ所あるここちし給ふも，うたてある心かな。（胡蝶四187）

前の二例は，雲林院に源氏が籠っているところ。仏道に心を入れ，時には出家者を羨しく思ったりもするのに，紫上のことを思い，神に仕える朝顔斎院にけしからぬ想像を馳せる，そういう源氏を無敬語で描くのは，語り手女房の批判，乃至はからかいの意識の表れだろう。

夕霧の場合には，次のような例がある。

○　（玉鬘が）うつたへに，思ひ寄らで取り給ふ御袖を，（夕霧は）引き動かしたり。（藤袴五107）
○　酔ひにかこちて苦しげにもてなして，明くるも知らず顔なり。（中略）されど明かし果ててぞ出で給ふ。（藤裏葉五178）

二例とも，この前後には敬語があり，下線の行動のみ敬語がつかない。藤裏葉巻の例は，感心しない行動のみ敬語を落とすことをよく示している。

次の鬚黒の例も，語り手は批判，からかいの意識のために敬語を用いないのだと思う。

○　（北の方を）おうなとつけて心にも入れず，いかでそむきなむ，と思へり。（藤袴五115）
○　（玉鬘がうちとけないので鬚黒は）いみじうつらしと思へど，おぼろけならぬ契りの程，あはれに嬉しく思い，「見るままにめでたく，思ふさまなる御かたち有様を，よその物に見果ててやみなましよ」と，思ふだに胸つぶれて，石山の仏をも，弁のお許をも，並べて頂かまほしう思へど，女君の深くものしと思し疎みにければ，え交らはで籠り居にけり。（真木柱五118）

真木柱巻冒頭のこの文からは，玉鬘を手に入れた後の彼の有頂点ぶりと困惑ぶりがよく伝わってくる。読んでいて思わず笑いがこみ上げてくるのは，敬語なし，という手法が大きく与かっているのではなかろうか。

次の例も，末摘花の動作が高貴な姫君らしからぬものであるため，語り手は敬語をつけなかったのではないか。

○　「さへづる春は」とからうじてわななかし出でたり。（末摘花二46）

4. 慣用により敬語が取捨されていると思われる場合もある。イ，ロ，ハ，ニ，ホ，に分けて述べる。

イ．消息文の前は敬語が省かれることが多い。次に例を挙げる。二つめの（　）内の人物は，消息文を書いた人物を示す。

○　中に小さく引き結びて（若紫一171）（源氏）

○　いとよう書きおほせたり。（末摘花二42）（末摘花）

○　とばかりいささか書きて，中納言の君のなかにあり。（須磨三43）（朧月夜）

○　高麗の胡桃色の紙に，えならず引きつくろひて（明石三82）（源氏）

○　など書きて（明石三90）（源氏）

○　にび色の紙の，いとかうばしうえんなるに，墨つきなどまぎらはして（澪標三130）（斎宮）

下線の語に敬語がないのは，書く，引き結ぶ，などの動作よりも，文を受けとる側の見る，「書いてあって」「結んであって」という，文の状態を表す方に重点のかかった記述のためと思う。

ロ．「さま」「やう」に続く語では敬語が省かれる。

○　人々の苦しと思ひたれば，聞かぬやうにて，まめやかなる御とぶらひを聞えおき給ひて帰り給ひぬ。（若紫一178）

○　見ぬやうにて外の方をながめ給へど（末摘花二37）

○　例の心とけず見え給へど，見知らぬやうにて，「……」と教へ聞え給ふ。（松風三199）

○　寝たるやうにて動きもし給はず。（乙女四97）

○　うち頼めるさまに，すくよかなる御返りばかり聞え給へるを（賢木二162）

○　見知らぬさまにもてなし聞え給ふ。（蛍五20）

これらは，文の後方にある「給ふ」に敬意が代表されているためかとも思われるが，類例が多い（12例）ので挙げておく。

ハ．「……や否や」の意味を表す時には敬語が省かれる。緊迫感を出すためかと思われる。特に「見る」は「見るとすぐに」の意の時，敬語がないことが多い。

○　見るままに（花宴二83）

○　たどりありくと見るにおどろきて（須磨三64）

○　近き渡殿の戸おしあくるより，御簾のうちのおひ風，なまめかしく吹きにほはして（初音四159）

○　らうたげに寄り臥し給へりと見る程に，にはかに起き上がりて（真木柱五129）

次の例も，「咄嗟に」という感じを出すために敬語をつけないのではないか。

○　さと光るもの，紙燭を差し出でたるか，とあきれたり。（蛍五22）

ニ．助動詞「べし」に続く語には敬語が付かない。これは「べし」が本来作中人物の推量を表すためと思われる。

○　文やり給ふに書くべき言葉も例ならねば，筆うちおきつつすさび居給へり。（若紫一184）

○　心よりほかなる怠りなど，罪許されぬべく聞え続け給ひて（葵二100）

○　言ひとどむべき方もなくて，いとど音をのみたけきことにてものし給ふ。（蓬生三146）

○　見聞き入るべくもあらざりしを，名残りなく南の御簾の前に据ゑ奉る。（藤袴五112）

ホ．次のような語法の時には，敬語を付けない。

○　見も知らぬ四位五位（若紫一192）

○　かつ損はれ給ふことどもを見る見るも，尽きせず思し惑へど（葵二110）

○　ただ泣きに泣きて御声のわななくも（行幸五85）

又，次のような例は引き歌，或いは成句を利用したもので，主語を特定の人物と考える必要はないと思う。

○　子の道のまとはれぬにやあらむ。（須磨三44）

○　思ふどち見まほしき入江の月影（明石三87）

○　かしこには，待つ程過ぎて（末摘花二33）

以上，ニに挙げた諸例は，語り手を光源氏らに近侍した女房だと仮定し，その女房の立場で敬語を取捨した考えても不自然ではなく，玉上氏指摘のたてまえと齟齬しないと考えてよいだろう。

猶，敬語の有無のどちらが原則と決められない人物として，頭中将，明石御方，明石尼，柏木及びその弟たち，近江君，左兵衛督とその弟たち（紫上の異母兄弟）などがいる。頭中将は初期には敬語が付かないことが多いが，三位になった葵巻のあたりから付くようになる。賢木巻ではまだ不安定だが，宰相中将になった須磨巻からは安定して付くようになる。明石御方については，秋山虔氏[18]，荒井弘氏[19]の詳しい論考がある。

以上で敬語が例外的に取捨されている原因の考察を終わるが，なぜ例外になっているのかわからないもの，又一及びニに挙げた原因のいずれに依るのか判断しかねるものもあった。その中のいくつかを挙げ，考えたことを述べておく。

○　うけばりてあかぬことなし。（桐壺一43）

上の「うけばり」の主語を藤壺ととる説と，帝ととる説がある。どちらにしても異例である。源氏には「六条の院も（中略）まことの太上天皇の儀式にはうけばり給はず」（若菜上）の例があり，なぜここが無敬語なのかわからない。

○　雛など，わざと屋ども造りつづけて，もろともに遊びつつ，こよなき物思ひの紛らはしなり。（若紫一193）

若草君を引き取った翌日の記事の最後の文である。体験話法かと思うが，源氏の場合には具体的動作に敬語が落ちる体験話法は他になく，断定するにはためらいを感じるので，暫く不明としておく。「物思ひ」という語は，第一部では「御物思ひ」が4例，「物思ひ」が40例だが，このうち38例は無敬語でよいもの，或いは一文中の他の敬語で敬意を代表されていると考えてよいものばかりであって，異例なのは，上の例と，

○　この月頃は，ありしにまさる物思ひに，異事なくて過ぎ行く。（若紫一176）

の2例である。この例もなぜ無敬語なのかわからない。

○　青海波のかかやき出でたるさま，いと恐しきまで見ゆ。……顔のにほひ……さるいみじき姿に，菊の色々うつろひ，えならぬをかざして，今日はまたなき手をつくしたる（紅葉賀二52）

青海波の舞を見る観客の中に帝もいるので，舞手の源氏に敬語がつかないのか。はじめの「かかやき出でたる」は源氏を波と見立てたためかとも思う。

○　「まことはうしや世の中よ」と言ひあはせて，「とこの山なる」とかたみに口がたむ。（紅葉賀二74）

この他にも，源典侍をめぐって，源氏と頭中将が争う記事の中で，二人が主語となる動詞に敬語がない。これは玉上氏の言われた通則「身分差ある人々を一括して叙する時は，敬語はその高きに従ふ」[20] と合わない。若い二人の奔放な行動に対し，語り手が批判，或いはからかいの気持を表したものか。

○　（源氏が）よにめなれぬ御さまなれば，（花散里は）つらさも忘れぬべし。（花散里二186）

花散里巻の他の個所でも，他の巻でも花散里には敬語が付く。語り手が「忘れぬべし」と推定しているのだと思うが，なぜ無敬語なのか分からない。

○　（朱雀帝の）御さま，かたちも，いとなまめかしうきよらなれど，思ひ出づる事のみ多かる心のうちぞかたじけなき。（須磨二47）

「かたじけなき」を朧月夜の心情と取る説と，語り手の朧月夜評と取る説とがある。前者なら無敬語なのは体験話法のためであり，後者なら帝と朧月夜との身分差のためである。どちらとも決めかねる。

○　（源氏は）いとにほひやかにほほゑみて
　　行きて見てあすもさねこむなかなかにをちかた人は心おくとも（薄雲三28）

上の文では，歌の前の動作に敬語が落ちている。このような例は須磨三61，明石三95，澪標三113にも見出せるが，理由は不明。

○　よそよそになりては（夕霧は）これをぞ静心なく思ふべき。（乙女四80）

○　（雲居雁は）あいなく御顔も引き入れ給へど，あはれは知らぬにしもあらぬぞ，憎きや。（乙女四91）

○　さるは（玉鬘は）心のうちにはさも思はずかし。（胡蝶四182）

語り手が三人の心中を推量，又は批評したものである。この語り手は近侍女房なのであろうか，それとも，それとは位相の異なる語り手なのであろうか。源氏物語の叙述の方法を探る重要な手がかりを与えてくれている三例だと思うのだが，未だ明確な判断を持てないので，暫く不明としておく。

○　かやうの人々（女房たち）にも言少なに見えて，心とくべくももてなさず，いとすくすくしう気高し。（野分五75）

上は夕霧が明石姫君の女房と話を交わす場面。この前後には敬語があるのに，なぜこの文だけ無敬語なのか不明。

○　（柏木が）「御供にこそ」と宣へば，（夕霧は）「わづらはしき随身は否」と返しつ。（藤裏葉五174）

通常は柏木より夕霧の方が敬意を持って遇されているのに，なぜここは逆になっているのか分からない。

結　語

源氏物語には，玉上氏の指摘されたとおり，光源氏らに近侍した古女房の見聞を筆録した，というたてまえがある。地の文において，一定の身分以上の作中人物たちに敬語が使われるのも，そうした語り手の立場を表しているのだろう。だが，例外的に敬語が取捨されることもよくある。その原因は様々であるが，例外的に敬語が取捨される用例のうちあるものは，近侍女房の立場で敬語を取捨したと考えて不自然ではない。しかしあるものは，語り手が，作中人物に添った視線で語ったり，作中人物と一体化してその人物の心情，感覚，動作，状態などを述べたりするために敬語が例外的に除去されていると思われ，この語り手は，種々の徴により，たてまえによって設定された近侍古女房とは位相の異なる，むしろ作者に近い存在であるように思われる。この，作中人物の視線に添ったり，一体化したりして述べる表現方法は，作中人物の心情，感覚，場面の緊迫感，臨場感を生き生きと伝えるのに効果的である。この表現法と前述のたてまえとは，場面や話題によって使い分けられているのではなく，たてまえと並行してこの表現法が使われる，といった体である。

紫式部は源氏物語執筆にあたり，近侍女房の見聞の筆録，というたてまえを設定した。だが物語の内容が必要

とする時には，その設定に捉われず，もっと自由な立場からする表現を随所に織り込んだのではなかろうか。敬語の例外的除去は，その表れだと思うのである。

（以上）

付　1

体験話法により敬語が除去されていると思われる用例のうち，本文中に引用しなかったものを次に掲げる。

○　御文などのかよはむ事のいとわりなきをおぼすに，いと胸いたし。（帚木一86）
○　下つかた思ひやるに，あながちに丈高き心地ぞする。（夕顔一105）
○　おいらかならましかば，心苦しきあやまちにてもやみぬべきを，いとねたく，負けてやみなむを，心にかからぬ所なし。（夕顔一111）
○　踏みとどろかす唐うすの音も，枕がみと覚ゆる。（夕顔一120）
○　みち遠くおぼゆ。（夕顔一137）
○　やや深う入る所なりけり。（若紫一151）
○　高き所にて，ここかしこ僧房ども，あらはに見おろさるる。（若紫一152）
○　立つ音すれば，帰り給ひぬ。（若紫一158）
○　初夜と言ひしかども，夜もいたう更けにけり。（若紫一162）
○　あらざりけり，とあきれて，恐ろしと思ひたれば（若紫一189）
○　あなたより来る音して（若紫一178）
○　御かたちはさし離れて見しよりもいみじう清らにて（若紫一191）
○　とりなさむもまばゆし。（末摘花二36）
○　見ならはぬ心地ぞする。いとどうれふなりつる雪，かきたれいみじう降りけり。（末摘花二37）
○　荒れたる様は劣らざめるを，程の狭う，人気の少しあるなどに慰めたれど，すごう，うたていざとき心地する夜のさまなり。（末摘花二37）
○　おし開いて来ませとうち添へたるも，例にたがひたる心地ぞする。（紅葉賀二69）
○　うとましや，何事をかくまでは，と覚ゆ。（紅葉賀二70）
○　いと若うをかしげなる声の，なべての人とは聞えぬ，「朧月夜に似るものぞなき」とうち誦して，こなたざまには来るものか。（花宴二79）
○　見るままに生ひなりて，愛敬づき，らうらうじき心ばへいと殊なり。（花宴二83）
○　……と見知るに，いよいよ口惜しう覚ゆ。よろづにつけて光失せぬる心地して，くんじいたかりけり。（葵二116）
○　「つれづれにて恋しと思ふらむかし」と忘るる折なけれど，ただめ親なき子を置きたらむ心地して，「見ぬ程うしろめたく，いかが思ふらむ」と覚えぬぞ，心安きわざなりける。（葵二118）
○　親しき家司どもばかり，ことに急ぐことなげにてあるを見給ふにも，今よりはかくこそは，と思ひやられて，ものすさまじくなむ。（賢木二146）
○　ほどなく明けゆくにやとおぼゆるに，ただここにしも「とのゐ申しさぶらふ」とこわづくるなり。（同150）
○　この女君の，いとらうたげにてあはれにうち頼み聞え給へるを，ふり捨てむこといとかたし。
○　例の，月の入りはつる程，よそへられてあはれなり。（須磨三31）
○　かとりの御直衣指貫，さま変りたる心地するもいみじきに，「さらぬ鏡」と宣ひし面影の，げに身に添ひ給へるもかひなし。（須磨三42）
○　まづ追ひ払ひつべき賤の男の，むつまじうあはれに思さるるも，我ながらかたじけなく，屈しにける心のほど思ひ知らる。（明石三66）
○　同じさまにて年古りにけるもあはれなり。（蓬生三153）
○　いたうすげにみたる口つき思ひやらるる声づかひの，さすがに舌つきにて，うちざれむとはなほ思へり。（朝顔四59）
○　かんざしおもやうの，恋ひ聞ゆる人のおもかげに，ふとおぼえて，めでたければ（朝顔四66）
○　いとど文なども通はむことの難きなめり，と思ふにいと嘆かし。（乙女四90）
○　男君も今すこしものはかなき年の程にて，ただいとくちをしとのみ思ふ。（乙女四92）（男君＝夕霧）
○　男君，我をば位なしとてはしたなむるなりけりと思すに，世の中うらめしければ，あはれも少しさむる心地して，めざまし。（乙女四96）
○　暗ければ，こまかには見えねど，程のいとよく思ひ出でらるるさまに，心移るとはなけれど，ただにもあらで（乙女四99）
○　ものつつましき程の心には，なげかしうてやみぬ。かたちはしも，いと心につきて，つらき人のなぐさめにも，見るわざしてむやと思ふ。（乙女四101）
○　涙ぐまるる折々あり。（乙女四102）
○　立ちまさるかたの事し心にかかりて，程ふるままに，わりなく恋しき面かげに，またあひ見でや，と思ふよりほかのことなし。（乙女四104）
○　「心ばへのかうやうにやはらかならむ人をこそあひ思はめ」と，思ふ。（乙女四104）

○　母君は，ただいと若やかにおほどかにて，やはやはとぞたをやぎ給へりし，これは気高く，もてなしなど恥づかしげによしめき給へり。筑紫を，心にくく思ひなすに，皆見し人は里びにたるに，心え難くなむ。（玉鬘四138）

○　……とほのかに聞え給ふ声ぞ，昔人にいとよく覚えて若びたりける。（玉鬘四148）

○　似るとはなけれど，なほ母君のけはひにいとよくおぼえて，これはかどめいたる所ぞ添ひたる。（胡蝶四176）

○　かやうなるけはひは，ただ昔のここちして，いみじうあはれなり。（胡蝶四185）

○　近やかに臥し給へば，いと心うく，人の思はむ事もめづらかにいみじう覚ゆ。（胡蝶四185）

○　いとど思はずに心づきなき御心のありさまをうとましう思ひ果て給ふにも，身ぞ心うかりける。（胡蝶四186）

○　母君のおはせずなりにける口惜しさも，またとりかへし惜しく悲しく覚ゆ。（蛍五19）

○　さる方になどかは見ざらむ，と，心とまりぬべきをも，強ひてなほざりごとにしなして，なほかの緑の袖を，見え直してしがなと思ふ心のみぞ，やむごとなき節にはとまりける。あながちになどかかづらひ惑はばたふるる方に許し給ひもしつべかめれど，つらしと思ひし折り折り，いかで人にもことわらせ奉らむ，と思ひ置きし，忘れ難くて，正身ばかりには，おろかならぬあはれを尽くし見せて，大方にはいられ思へらず。（螢五35）

○　今ぞ思ひ出づるに，胸ふたがりて，いみじく恥づかしき。（常夏五48）

○　中将，夜もすがら荒き風の音にもすずろにものあはれなり。心にかけて恋しと思ふ人の御事はさしおかれて，ありつる御面影の忘られぬを，こはいかに覚ゆる心ぞ，あるまじき思ひもこそ添へ，いと恐しき事，とみづから思ひ紛らはし他事に思ひ移れど，なほふと覚えつつ，来し方行く末あり難くもものし給ひけるかな，かかる御なからひに，いかで東の御方，さる物の数にて立ち並び給ひつらむ，たとしへなかりけりや，あないとほし，と覚ゆ。大臣の御心ばへをあり難しと思ひ知り給ふ。人がらのいとまめやかなればにげなさを思ひ寄らねど，さやうならむ人をこそ同じくは見て明かし暮らさめ，限りあらむ命の程も今少しは必ず延びなむかし，と思ひ続けらる。（野分五65）

○　「何事ぞや，またわが心に思ひくははれるよ」と思ひ出づれば，いと似げなき事なりけり，あなものくるほし，ととざまかうざまに思ひつつ（野分五66）

○　これはた，さいへど気高く住みたるけはひ有様を見るにも，さまざまに思ひ出でらる。（野分五68）

○　さにこそはあらめと思ふに，胸つぶつぶと鳴る心地するもうたてあれば，ほかざまに見やりつ。（野分五69）

○　中将，いとこまやかに聞え給ふを，いかでこの御かたち見てしがな，と思ひ渡る心にて，すみのまの御簾の几帳は添ひながらしどけなきを，やをら引きあげて見るに，紛るるものども取りやりたれば，いとよく見ゆ。かくたはぶれ給ふ気色のしるきを，「あやしのわざや。親子と聞えながら，かくふところ離れずもの近かべき程かは」と目とまりぬ。「見や付け給はむ」と恐しけれど，あやしきに心もおどろきてなほ見れば，柱がくれに少しそばみ給へりつるを，引きよせ給へるに，御髪のなみよりてはらはらとこぼれかかりたる程，女もいとむつかしく苦しと思ひ給へる気色ながら，さすがにいとなごやかなる様して寄りかかり給へるは，ことと馴れ馴れしきにこそあめれ。「いであなうたて。いかなる事にかあらむ。思ひよらぬ隈なくおはしける御心にて，もとより見馴れおほしたて給はぬは，かかる御思ひ添ひ給へるなめり。うべなりけりや。あなうとまし」と思ふ心も恥づかし。女の御さま，げにはらからといふとも，すこし立ちのきてことはらぞかしなど思はむは，などか心あやまりもせざらむ，と覚ゆ。きのふ見し御けはひにはおとりたれど，見るに笑まるる様は立ちも並びぬべく見ゆる。八重山吹の咲き乱れたるさかりに露のかかれる夕映ぞ，ふと思ひいでらるる。折にあはぬよそへどもなれど，なほうち覚ゆるやうよ。花は限りこそあれ，そそけたるしへなども交るかし。人の御かたちのよきはたとへむかたなきものなりけり。御前にも出で来ず，いとこまやかにうちささめき語らひ聞え給ふに，いかがあらむ，まめだちてぞ立ち給ふ。女君，

「吹き乱る風のけしきにをみなへししをれしぬべき心地こそすれ」

くはしくも聞えぬに，うち誦じ給ふをほの聞くに，憎きもののをかしければ，なほ見はてまほしけれど，近かりけりと見え奉らじと思ひて，立ち去りぬ。（野分五71）

○　見つる花の顔どもも思ひ比べまほしうて，例は物ゆかしからぬ心地に，あながちに妻戸の御簾をひききて几帳のほころびより見れば，物のそばよりただはひ渡り給ふ程ぞ，ふと見えたる。人のしげくまがえば，何のあやめも見えぬほどに，いと心もとなし。薄色の御衣に，髪のまだ丈にはづれたる末の，ひき広げたるやうにて，いと細くちひさき様体，らうたげに心苦し。をととしばかりは，たまさかにもほの見奉りしに，またこよなく生ひまさり給ふなめりかし，まして盛りい

かならむ，と思ふ。かの見つるさきざきの桜，山吹といはば，これは藤の花とやいふべからむ。木高き木より咲きかかりて風になびきたるにほひはかくぞあるかし，と思ひよそへらる。かかる人々を心にまかせて明け暮れ見奉らばや，さもありぬべき程ながら，へだてへだてのけざやかなるこそつらけれ，など思ふに，まめ心もなまあくがる心地す。（野分五75）

○　ふすべられける程あらはに，人もうし給ひぬべければ，脱ぎ替へて，御湯殿など，いたう繕ひ給ふ。（真木柱五131）

○　この御方には，かう用意なき事聞えぬものを，と思ひまはすに，この聞く人なりけり。（真木柱五152）

○　かく少したわみ給へる御気色を宰相の君は聞き給へど，しばしつらかりし御心をうしと思へば，つれなくもてなし静めて，さすがにほか様の心はつくべくも覚えず。（梅枝五167）

付　2

敬語が例外的に取捨されている原因が不明な用例のうち，本文に挙げなかったものを次に掲げる。様々な考え方をすれば原因の見当が付く例もあるが，ひとまず不明と思われたものを掲げておく。

○　みな笑ひぬ。（帚木一73）

○　人やりならずおぼし乱るる事どもありて，大殿には絶え間置きつつ，恨めしくのみ思ひ聞え給へり。（夕顔一113）

○　よろづに思ふも，心のとまるなるべし。（花宴二81）

○　うとましうなりぬ。（葵二105）

○　よそ人に見奉りなさむが惜しきなるべし。（葵二122）

○　言の葉筆づかひなどは，人よりことになまめかしく，いたり深う見えたり。（須磨三45）

○　……とひとりごち給ひて，例のまどろまれぬ暁の空に千鳥いとあはれに鳴く。（須磨三56）

○　睨み給ひしに見合はせ給ふと見しけにや，御目わづらひ給ひて，堪へ難うなやみ給ふ。（明石三85）

○　かの高砂うたひし君もかうぶりせさせて，いと思ふさまなり。（澪標三106）

○　そばめこまやかに見ゆ。（松風三200）

○　女は心憂く，いかにせむとおぼえて，わななかるけしきもしるけれど（胡蝶四184）

○　まことの親の御あたりならましかば，おろかには見放ち給ふとも，かくざまの憂きことはあらましやと悲しきに，つつむとすれどこぼれ出でつつ，いと心苦しき御けしきなれば（胡蝶四185）

○　なほかのあり難かりし御心掟を，方々につけて，思ひ染み給へる御事ぞ，忘られざりける。（真木五柱149）

注

1）「源氏物語の読者」（『源氏物語研究』所収）

2）「敬語の文学的考察」（『源氏物語研究』所収）

3）島津久基著『日本文学考論』186p.

4）西尾光雄著『日本文章史・中古』615p.

5）普通「たばかり」の主語を王命婦と解しているが，源氏であるとも解し得る。とすると「たばかり」も例外的に無敬語である。

「たばかる」は，次に挙げるように，恋の当事者である男が，相手の女に逢う工面をする意に使われることがある。特に賢木巻の例は若紫巻の例と事情が酷似している。

○　（源氏が）心深くたばかり給ひけむことを知る人なかりければ（賢木巻　源氏が藤壷に近付いた場面）

○　わたり給はむことは，とかうおぼしたばかる程に，日頃経ぬ。（松風巻）

○　匂宮は宇治に）あさましうたばかりておはしましたり。（浮舟巻）

だから，ここの「いかがたばかりけむ」を，源氏が「自分は一体どうやってここまでやって来られたんだろうか」と自身をいぶかっている意味にも解し得る。その方が「うつつとも覚えぬ」という気持ともよく響き合い，この一文に王命婦という第三者が入って来ないだけに一途な源氏の心が汲み取れてよいかと思う。しかし，「たばかる」は仲介役の女房が男を女の寝所に導く意に使うことも多く，「いかが……」の直前には王命婦も登場しているので，「たばかり」の主語を源氏であると断定もできない。

6）『湖月抄』では「草子地」と注する。

玉上氏『評釈』では「物語を語る女房が物語を語る立場をはなれて，批評を加えた部分」。

小学館『全集』では，「待たるるも」を「お待ちする気になられるのも」と敬語表現で訳し，やはり語り手の立場からの批評のように解している。

猶，ここは語り手が御息所の心弱さに対して批判意識を持っているから敬語を落としたのだとする説があるが，批判意識から敬語を落とす場合は，10p.に述べたように，好色な振舞などに対し少々からかい気味に批判していることが多く，ここのような真摯な心情の場合にはあてはまらないと思う。

7）「ここちす」や「おぼゆ」は，「波」，「涙」がそれぞれの主語と考えれば，無敬語でも例外ではない。しかしそうだとしても，引用した部分は源氏の心に

映ずるままを述べた文である。

8) 根来司著『平安女流文学の文章の研究　続編』6p.

9) 2)に同じ。

10) 津田敏栄氏は，野分巻と乙女巻における夕霧に関して，「思ふ」類に敬語のつかない比率が，雑類の動詞に敬語のつかない比率に比べて断然多いことを，数字で示しておられる。「源氏物語における敬語の特殊相」(『山口国文』昭和55年３月)

11) 「(藤壺は) 御胸をつぶし給ひつつ」(賢木二151)，「(弘徽殿大后は) 御胸つぶし給へど」(真木柱五151) と比べると「胸ふたがる」は敬語がついていない表現である。

12) 「左の大臣 (略) 涙落し給ふ」(紅葉賀二78)，「(源氏は) 忍ぶれど涙ほろほろとこぼれ給ひぬ」(賢木二173) と比べると「涙ぞ落つる」は敬語がついていない表現である。

13) 「源氏物語における『き』の用法」(『源氏物語を中心とした論攷』)

14) 近侍女房の回想を表す「き」は，13) の吉岡氏の論文のリストを参照した。

15) 「源氏物語の内話」(穐田定樹『中古中世の敬語の研究』)

16) 「源氏物語に見られるある種の待遇表現について」(『学習院大学国語文会会誌』17号)

17) 『源氏物語評釈　第一巻』333p.

18) 「源氏物語の敬語」(秋山虔『王朝の文学空間』)

19) 「源氏物語の待遇表現」(『学習院大学国語国文学会誌』23号)

20) 2)に同じ。